

近代における園芸領域への団らんの浸透 —女学雑誌と園芸書の分析から—

水 島 かな江

原稿受付平成 19 年 8 月 10 日；原稿受理平成 19 年 11 月 2 日

How the Notion of “Happy Circle” Came into the Horticulture Domain during the Meiji Era

—From an Analysis of *Jogakuzasshi* and Horticulture Documents—

Kanae MIZUSHIMA

Both the term “katei,” a translation of “home,” and the term “engei,” a translation of “horticulture,” began to be used in the Meiji era. Then, a newly created term “katei-engei” gained popularity to describe a happy family activity. In this paper, the author has made a research of the process of formation of this term by delving in literature related to horticulture in this country as well as *Jogakuzasshi*, a women’s magazine of the time. As a result, it became clear that the term gradually became popular in the following way: 1) Iwamoto Yoshiharu advocated in *Jogakuzasshi* an ideal of “home” and “the happy circle within a family.” 2) For having a happy time, the housekeeping elements of cleanliness and decoration began to be included in a female role. 3) Household management began to be taken up in the magazine. 4) Gardening and horticulture were included in the household management. 5) Then, “katei-engei,” as a happy circle within a family, was given birth in the domain of horticulture. In other words, the movement upholding the importance of home and happy family activities, which are believed to be a modern family’s origin, helped to clarify the female role within a family as to the household management, and brought “engei” into the home domain.

(Received August 10 2007; Accepted in revised form November 2, 2007)

Keywords: horticulture 園芸, home circle 団らん, gardening 家庭園芸, *Jogakuzasshi* 女学雑誌, home garden 住宅庭園, housewife’s work 主婦労働.

1. 緒 言

平成 18 年 5 月、厚生労働省による『家族と地域の絆再生プラン（仮称）』の「中間とりまとめ」（厚生労働省 2006）が行われ、家族の絆を再生するための具体的な施策例として、毎月 1 週間程度の「家族の週間」及び年 1 回の「家族の日」を設けることが提案された。

歴史上、「家族の週間」、「家族の日」の設定が提案されたのはこれが初めてであるが、ここで強調されているのが一家団らんや家族（や地域）の行事（食事会、リクリエーション、旅行等）である。

家族が一家団らんし、ともに楽しむことの重要性については、明治 9 年発行の『家庭叢談』においてもすでにとりあげられている。『家庭叢談』第 1 号では、「世帯ノ要ハ家族ノ心ヲ楽シマシムルニアリト云ヘリ」（家庭叢談 1876a, 3）と、家庭と類似の「世帯」をあ

げて、そこで家族の心を楽しませることが重要であると述べられている。この「家族ノ心ヲ楽シマシムル」ことは、『家庭叢談』第 3 号（1876b, 8）で、「家族団欒ノ楽」を共にすることがないのはよくないと、家族が集まって車座に座るという意味を含んだ「団らん」という語に置き換えられる。

その後「家族団欒ノ楽」は、巖本によって「ホーム」における「一家の和楽団欒」（巖本 1888a）として提示され、この「ホーム」と「和楽団欒」のつながりが、それまでの家族と異なる近代家族を規定するもの（落合 1989；牟田 1990；山本 1991；宮森 1993）となる。即ち、それまで単なる家族が生活を営む場所としての意味しかなかった「家庭」*1 に新たな意味が付与され、「近代日本において初めて「ホーム」の意味内容の中心に家庭の幸福＝「一家の和楽団欒」という愛情を基

盤に成り立つ家族成員相互の情緒的コミュニケーションを捉え」(山本 1991, 84), 近代家族の源流となる新しい日本の家族の理想像が明示されるのである。

小山(1999)はこの新しい家庭観をもった家族の特徴として、近代的な性別役割分業が行われる家族で、そこでは「一家団欒」「家庭の和楽」が追求すべき価値とされ、さらに、子どもが大人とは異なる特別な存在として位置づけられていることをあげている。

このような一家団らんという新しい価値を含んだ「家庭」観は、「女学雑誌」で、プロテスタントである巖本善治や内村鑑三等を執筆者とした「ホーム」論として展開され(犬塚 1989), それ以後の「家庭」を冠して発行される多くの雑誌とともに、明治20年代後半から30年代にかけて急速に普及していった。

「家庭」には、「庭」という語が含まれているが、庭は「祭場を斎の庭、戦場を戦の庭とよんだように、ある事をする場所をいい」(川添 2003, 12), 家庭の庭で行われるもののひとつに園芸がある。「園芸」という語も、「家庭」や「一家団欒」と同じく、近代に入って成立した言葉で^{*2}, 近世において、樹芸、種樹など様々な呼び方をされた草本・木本などの植物およびそれらを用いた造園に関わる営みを総称するための言葉である。

このともに新しい「家庭」と「園芸」から生まれたのが「家庭園芸」という語で、明治36年5月には、『家庭園芸談』と、その語をタイトルに含んだ書籍が出版されている。目次には、「団欒の娯楽」、「高逸なる趣味」、「好事家の研究」と、園芸を行う理由がいくつかあげられているのだが、これにみるように、一番の理由は、一家団らんして楽しい家庭を作ることなのである^{*3}。

近世において、特定の階層だけでなく、一般の庶民も含めた老若男女が関わった日本の園芸文化は、庶民の娯楽として世界的に見ても高水準であったという(青木 1999)。近代化の中でいったんは低迷したといわれる園芸であるが、いったいどのような経緯で、そ

の目的を家族の団らんとする「家庭園芸」が生まれたのであろうか。

「家庭」の改良を行うことを目的として創刊された「婦女新聞」では、家族全員が揃って食卓を囲む「一家団欒」^{*4}は食事の場のみにとどまって、「家庭」の改良の手段としては充分でないと指摘する。そして、子供を中心に家庭で実践し、収穫したものを食卓に載せる「趣味」としての「園芸」こそ、従来とは異なる家族による手作りの「一家団欒」で、このような団らんが、「家庭」の生活改善を促す新しい文化を誕生させると、「園芸」を勧める啓蒙活動を行った(仙波 1995)。このことから、婦女新聞が創刊された明治33年には、「園芸」が一家団らんの方法としてふさわしいとする言説があったことが伺える。しかし、これ以前に、園芸が一家団らんを目的としていたかどうかに関する研究はなく、「家庭園芸」がどのように成立してきたかについてもまだ明らかにされていない。

以上のことから、本稿では、家族の団らん、園芸をその研究対象とし、それらがどのような経緯で関係を結び、「家庭園芸」を生み出していったのか、家庭と園芸の関係について明らかにすることを目的とする。

2. 研究の方法および資料

「家庭園芸」の成立に至る家庭と園芸の関係を調べるにあたって、2つの方向から資料収集および分析を行うことにした。

一つは、「和楽団欒」からの流れである。家族に対し「和楽団欒」を薦める言説の登場後、その手段として「園芸」が取り入れられていったのかどうかという視点から、「ホーム」における「一家の和楽団欒」といった巖本(1888a)の言説を取り上げている女学雑誌を主な対象としてその分析を試みた。

そして、もう一つは「園芸」そのものの流れからの分析である。ここでは園芸や造園に関連する文献を用いて、園芸と家庭がどのように関わっていったのかについて調査を行った。具体的な資料は以下にあげる。

^{*1} 川添(2003, 12)によると家庭は、古くは「やにわ」と呼ばれ、初見は応神天皇の国見の歌だが、明治になるまでほとんどつかわれていないという。

^{*2} 辻村(1931, 1-72)によれば、成語としての「園芸」は、明治初年、『英華字典』が翻刻されるとともに、輸入されたものであるという。

^{*3} 明治36年から40年にかけて、多くの「家庭園芸」を含む書籍が出版されているが、いずれも家族の団らんによいとす記述が含まれている。

^{*4} 「婦女新聞」の発行は明治33年だが、表(1998)によれば、明治30年代には、ほとんどの家事教科書で一家団らんに関する記述がみられ、食事中の団らんも薦められていたという。家族団らんと食事の共有については、表の詳細な研究(1998, 2001, 2006)がある。

近代における園芸領域への団らんの浸透

表 1. 園芸関係資料

書 名	著 者	発行年	出版社
実地応用技芸百科全書 第六編 泰西園芸術	前原幽園 抄訳	明治 22.6- 明治 23.5	博文館
園芸考	横井時冬	明治 22.12	大八州学会
図解庭造法	本多錦吉郎	明治 23.3	団々社
園芸論	鈴木文次郎	明治 23.7	伊藤活版所出版部
通俗菓園法	青柳浩二郎	明治 26.3	博文館
簡易園芸法	角田音吉編	明治 26.5	博文館
日用百科全書 第八編 住居と園芸	大橋又太郎編集	明治 29.1	博文館
蔬菜草花栽培全書	高橋久四郎	明治 30.5	東京興農園
園芸学	高橋久四郎	明治 34.6	大日本実業学会
果樹草花盆栽培庭造 園芸全書	江原梅松(春夢)	明治 35.5	博文館
園芸学講義	近藤 隆	明治 35.5	静岡県安倍郡農会
園芸通論	高橋久四郎	明治 36.3	博文館
家庭園芸談	小谷保太郎編	明治 36.5	吉川弘文館

(1) 雑誌資料

「女学雑誌」を主な資料として分析を行った。「女学雑誌」は明治 18 年から明治 37 年 2 月まで、月 2 回の割合で出版され、当時としては長く継続し、その数は 543 冊にのぼる。巖本善治が「一家の和楽団欒」について語った「日本の家族」と題する社説は明治 21 年に掲載されたが、それ以前の流れも確認するため、創刊号からの検討を行った。

「女学雑誌」の編集を行った近藤賢三と巖本善治は、ともに津田仙の作った学農社農学校の出身者で、彼らはその学農社が明治 9 年に発行した「農業雑誌」の編集にも関わっている。そこで、「農業雑誌」も視野に入れ、その中の巖本および「女学雑誌」執筆者が書いたとされる記事についても同様の検討を行い、園芸と和楽団らんに関わる言説の有無を調べた。

また、当時の状況については、「明治の読売新聞 CD-ROM」を用いてその背景を把握することにした。

(2) 「園芸」関連の資料

園芸関係の資料を選択するにあたり、「家庭園芸」という語の含まれた書籍がいつ頃からあるかを、国会図書館および全国の大学図書館が所蔵する文献で検索した。その結果、大学図書館が所蔵するという限定つきではあるが、先に挙げた『家庭園芸談』が、「家庭園芸」を含む最初の文献であることがわかった。

そこで、調査に用いる資料は、明治初年から『家庭

園芸談』の発行された明治 36 年 5 月までに出版されたものをその対象とした。具体的には、国会図書館および全国の大学図書館が所蔵するものに加え、東京大学法学部附属近代日本法政資料センター、博文館の資料を所蔵する三康図書館(旧大橋文庫所蔵館)、そして日本近代文学館に登録されている書籍をその対象とした。これらの図書館等から検索した園芸や造園のカテゴリに分類されているもののうち、植物栽培や管理等の技術や植物生理学のような生物学や生理学的なものだけを含むもの、タイトルに園芸に関連した用語が含まれていても、和歌や文芸に属するようなものを除き、わずかであっても、はじめに総論的なものが含まれているもの(表 1)を、その分析対象資料とした。

なお、調べていく途中で、博覧会等の資料に「園芸」という用語が使われていることがわかったので、「園芸」概念を明確にするため、以下の資料も加えた。

* 津田仙(1897) 澳国博覧会農業園芸ノ伝習及爾後ノ状況 澳国博覧会参同記要

* 日本出品解説第一(1876) 米国博覧会報告書 米国博覧会事務局

* 明治十年内国勸業博覧会出品解説(1878) 明治十年内国勸業博覧会出品目録 内国勸業博覧会事務局

3. 結果および考察

(1) 雑誌資料の分析から

「女学雑誌」を中心とする雑誌資料を検討してわかったことを簡単にまとめると、巖本による家族の団らんに関する言説の登場後、団らんが家庭と結びつき、その担い手としての女性の役割が明確にされていくことである。そして、そういった過程のなかで、家政という項目ができあがり、そこに園芸が取り入れられていったことである。そこでこれらの結果の詳細を説明するにあたり、はじめに家庭と団らん、および団らんの方法について、そして団らんの担い手と家政の関係、最後に家政と園芸の関係の順で説明する。

1) 家庭、団らん、その方法

『家庭叢談』では、花見、月見、市中の見物、野辺の遊山などの外出、祭礼式、法事等の年中行事、あるいは、宴席、談話、遊戯、さらに、鳴り物も含んだ遊芸などが世帯^{*5}を楽しませる方法としてあげられている。ここでは、「世帯トハ衣食住ノ者ヲ程ヨク用ヒテ一家内ノ者ノ健康ヲ保チ其心ヲ楽シマムルコト」（家庭叢談 1876a, 3）であり、世帯や一家内については、それ以上の説明もなく、親戚や友人も含まれる家族との境界が緩やかなものとして扱われている。

この生活を楽しむ方法については、「叢話 遊樂の事」（巖本 1887）で、どんなに忙しくても、食事後は庭前でクロケ、眠る前は房内で琴を弾き、冬夜の炉辺では童児と談笑、そして3回の食卓では家族一同和樂をする西洋の例が紹介される。そして、「西洋にて女流の遊樂には、将棋、体操、乗馬、漕舟、水浴、氷すべり、舞踏、ピクニック、搜索、観劇、クロケ、カルタ、会談等数多の種類あり」と、女性個人を対象とした遊樂があげられるが、そこにはまだ家族で楽しむとか、庭や園芸を和樂の対象とするといった言説はみられない。そのことは、アメリカの女性が就いている職業（巖本 1886a）の中で、「蜜蜂を飼う女」の次に「庭づくり」が、日本人の女性の考え付かぬ仕事と紹介されていることでもわかる。

個人の遊樂を家族でするのが「家族団樂」で、「女子と耶蘇教」（其二）」（巖本 1886b）に現れる。巖本は、「人生最上の樂場所は何処にありや」の問いに答える形で、「傾きたりとも吾茅屋に住し貧なりと雖も

家族団樂し父子昆弟相親睦して少かも懸念なき吾家と云へるものぞ即ち人生最上の樂場所ならん」と、「吾家」に、ホームのルビをふり、吾家（ホーム）における家族団らんが、人生最上の楽しみであると述べている。そして、親睦のためには、「夫婦つねに相睦みて一点のさまたげなく兄弟相和して一人の他人なし」と、非家族成員を排除した家族で、ともに行動し団らんすることを薦めている。しかも、「女は男子をなぐさめて其心を引立てべきもの」であるから、「家内のかざり付け」など、家族の楽しみを増すような美術の一通りは心得るべきとする。

この家の装飾については、他の論者の演説でも「婦人の職掌（其一）」と題して、「…家の装飾です。日本家屋の一大欠点とも謂うべき者は快樂（チャフルネス）と云う者が更にありません」（平岩 1887）と、女性の役割のひとつとして述べられている。

吾家（ホーム）における家族団らんの重要性が取り上げられた後、非家族成員を排除した「家族」を前提とする「一家の和樂団樂」が、「ホーム」という語とともに社説「日本の家族」（一）に登場し（巖本 1888a, 113）、その方法についてあげられるのが、家内における遊樂である。

「家内に於ての遊樂には健全清潔の分子を含めども屋外の遊樂には必ず多少遊情放蕩の性質を存するものにて凡そ一家内にて遊び戯るは毫も心配するに及ばず」と、家庭内での私的な遊樂は健全でよいとする記述とともに、このような遊樂のあり方が「是れ即ち一家和樂の基」（巖本 1888b, 161）であると述べられる。

また、西洋人の食卓での団らんの例（巖本 1888c）や、カルタで楽しむ子供と親らの姿（巖本 1888d）の挿絵などで、家内で遊樂を行うことの大切さが繰り返し強調され、室内において団らんする幸福な家族のイメージが次第に形作られていくのである。

2) 女性の役割と「家政」項目の登場

女学雑誌では、このような団らんの担い手として、女性を位置づけた^{*6}。女性は「一家族の女王」（巖本 1888e）であって、家内で「花を挿し器具を布置し甘く室内を整理して静かに家中を楽しむことを以て尤も

^{*5} タイトルで「家庭叢談」と「家庭」という言葉が使われているが、第一号では、本文に「家庭」という語は一度も出てこない。「家庭」の語は、第三号（1876b, 14）で初めて登場する。

^{*6} 岩堀は、女学雑誌が、中上層階級の奥方に、「料理、家計管理、育児などの具体的な仕事をはっきりと妻の役割と固定し」、近代的な妻の役割を主婦の理想像として示していったことを分析している（岩堀 1995, 466-467）

近代における園芸領域への団らんの浸透

愉快に感ずるに至らん」と、家族のために花を挿して、気持ちのいい空間を作ることが、その「本領の働き場所」であるというのである。

この花を挿すことについては、すでに3年前の8号（清草庵 1885）で、茶の湯と並んで紹介されている。牡丹、芍薬など、それぞれの花についての水揚げ秘伝とともに、「草木とも毒のあるもの又枝葉面白くとも名の知れざる草木は生花にすべからずただ独り楽しみに挿すならば其人の勝手たるべし」と、花を挿す心得について述べられている。先の遊楽の勧めでもみたように、女学雑誌も初期のころには、花を挿す行為について、家族のための意識はない。人に見せる場合とそうでない場合といった意識はあるが、この花を挿して家を飾る行為が、家族のためという目的をもつのは、厳本によって家庭における団らんの重要性が語られ、その担い手として女性が位置づけられる明治21年以降と考えられる。

以後、「家庭」「ホーム」「団らん」の大切さが厳本やその他の論者によって語られ（伊勢 1888；厳本 1888f, 1889a, b；内村 1888；山岡 1888）、女性がその役割を担うことによって、国家に貢献するといった言説も登場する。「愛国心は愛家心なり」と、家愛して、家に献身する役割を担う女性は、愛国者として男性に劣らない（厳本 1889c）と、家庭と国家の関わりを背景として、「女に最も適したる事は家事」、あるいは、「女性の天職はホームを美にするに在り」（厳本 1889d, 229-232）と、女性の役割としての家事が繰り返し強調される（厳本 1889b）。

明治23年には、このような「ホーム」という語が「近頃ホームと云える言葉普通の如くなり行きたり」（厳本 1890a）と一般に広がった様子が伺われ、それとともに、ホームでの女性のあり方も周知されるものとなってくる。このような女性のあり方については、ドイツ留学中に家政学の授業を傍聴したりして、女性に家政教育をすることが国家の発展のために重要であると考えようになった新渡戸によって、家政学的重要性として語られる（新渡戸 1890）。以後、「英上流夫人、一日間のくらし方」（しづ子 1890）など、具体的な外国女性の暮らし方の例や、下婢の扱い方（厳本 1890b）などとともに、家政のありかたが語られるようになり、女学雑誌 第241号（1890）に「家政」という項目が登場するのである^{*7}。

3) 家政として庭づくり、園芸の登場

「家政」項目に、最初に登場するのが「婦人の心得

（一）」（中島 1890a）で、初めに「生計」、続いて「家の飾り」があげられている。この「婦人の心得（一）」はその後連載となって、244号では「家を楽しむの覚悟」（中島 1890b）があげられている。

このように、家政という項目内で、これまでと同様の女性の役割が繰り返されていくが、それまでと異なるのは、家政の精神（小糸 1890）のような、精神面のありかただけでなく、国政と家政（井上 1891）、家政簿記、家具一通りの入費（山下 1891a）、経済学（女子読本 1888）、廃物利用（山下 1891b）など、実学的なものが次第に含まれていくことである。

従って、それまで幾度も強調された団らんやホームについての言説が減少、具体的な家事や外国の紹介の例も増え、「安息の地は花園にてありき」と「花間の逍遥」と題したビーチャル夫人の庭園の様子（ビーチャル夫人 1892）の紹介記事が現れる。このような花園の紹介後、家政の項目中、「ホーム建設心得」（井上 1892）の一つとして「庭づくり」が登場する。しかし、ここでの庭づくりは、団らんのためにその重要性が語られるのではなく、正規風（茶座敷風）にするか、不規則風（田舎風）にするか、あるいはその中間にするかといった具体的な庭の作り方の説明だけである。

またこの後、「日本の花園」（ハート夫人 1892）と題して、外国人による日本の庭のすばらしさが語られる。そして翌年明治26（1893）年、「田家のこよみ」（畜勸子 1893）と題して「農事園芸」の紹介と「園芸法」が登場する。ここでの園芸は、現在使われている意味での園芸、即ち植物の育成技術を主とする「園芸法」で、以後、家政項目の中に「園芸法」の連載が始まるのである。

それまでほとんど取り上げられなかった庭や園芸が女学雑誌に登場する背景には、明治23年、初めての園芸の書物として『園芸考』（横井 1889）が出版されたこと、上野で日本園芸会の総会、懇親会が行われたこと（読売新聞 1890）、そして、第三回内国勸業博覧会などで庭や園芸関連のものが展示されたことなどが新聞を通して一般に報道されたことが考えられる。また、牡丹園、菊園などの開園といった園芸や庭園に関する社会の動きが活発になってきたことなどもあると

^{*7} 女学雑誌に「家政」という項目が登場するのは、明治23年の第241号で、このとき同時に、「笑ひ草」という娯楽の項目も登場する。この娯楽の項目登場も、これを用いての家族の談笑、団らんがその目的と考えられる。

考えられる。

このような家庭と園芸の結びつきは、347号(1893)で、園芸書である『簡易園芸法』(角田 1893)が『家政学』(下田 1893)と並んで紹介されることでもわかるように、園芸は家庭の領域にふさわしいものとして、その居場所が与えられていくのである。

明治27年発行の373号(320-322)では、「家の園播種の時節」(女学雑誌 1894)として、野菜、草花を植える時期、手入れの方法が一覧となって載せられる。以後、定期的に行う家事の一部として、その技術的な説明とともに連載されていくのである。

以上、主に女学雑誌を対象とし^{*8}、和楽団らんと家庭、そして園芸の関係がどのようにしてできてきたのかを説明してきた。そこで、今度はもう一方の視点、つまり園芸側の立場から、和楽団らんととの関係を考える。

(2)「園芸」関係資料の分析から

先述したように、園芸という語も明治になって成立した語で、「園芸の語が用いられる迄は専ら樹芸^{*9}と云われ」、昭和になってもその内容がきちんと確立せず、混乱していたという(辻村 1931, 3)。

そこで、園芸分野から「家庭園芸」への流れを探る前に、まずは、「園芸」という語の成立経緯^{*10}を整理したい。なぜなら、「家庭園芸」を理解するためには、そこに含まれる「園芸」という語の意味の変遷を理解する必要があると考えるためである。

1)「園芸」の成立経緯とその意味

日本が初めて正式に参加、出品した万国博覧会は、1873(明治6)年に開かれた澳国博覧会である。津田仙によるその報告(1897, 33-36)には、「農業及園芸審査官」として派遣され、専ら「園芸栽培ノ事」を学んだという「園芸」という語を用いた記述がある。また、博覧会に関するフランスのレポート(Rapports 1875)にはAgricultureとHorticultureをあわせた部

門のあることが紹介されているので、明治6年の段階で、Horticultureの訳語として「園芸」が用いられていたことがわかる。

この訳語としての「園芸」は、その後の明治9年の米国博覧会報告書の出展物の7区分でも用いられ、粧飾の樹木、灌木および花、園庭の器具、各種盆栽、そして園庭の作造が、「園芸」と言う項目で扱われている。これをみるとわかるように、「園芸」の内容は、江戸時代から続く庭造りを基にしたものである^{*11}。

この園芸という語が一般大衆に見える形で提示されたのが、明治14年4月12日の読売新聞の記事中の「博覧会の話し」で、そこに「園芸館」が登場する(読売新聞 1881)。

政府によって初めて示された「園芸」の定義は、ロシア万国園芸博覧会の報告書とともに、農商工公報に載せられた「園芸論」(農商務省 1985, 194-200)である。明治18年の農商工公報の「園芸論」では、園芸術は農業や山林とは別のもので、仏語で言う「ラルチキュルチュール」という園事を経営すること^{*12}であるという。従って、種樹術、養花術、造庭術がそのおもなものであり、果実蔬菜の栽培もまたその一部であることが記されている。しかし、この「園芸論」の中身には、まだそれ以前の造庭を主とする流れが色濃く残っており、従って、その後も書籍上ではその概念はなかなか統一されない。ただ、明治24年頃には一般向けの辞書に取り上げられているので、この頃には一般への浸透も始まっていたと思われる。

表2は、日本初の近代的国語辞典といわれる『言海』(1891)を初めとする辞書における「えんげい」を整理したものである。「言海」では、「園芸」は「えんげい」として取り上げられていて、現在広辞苑で説明されている「Horticulture」の訳としての「蔬菜・果樹・庭樹・花卉などの栽培。また、その技術」^{*13}を指すものではなく、「庭ヲ作ル技」となっている。

表をみるとわかるように、明治40年になって、やっと現在の意味が現れる。しかし、それ以後もまだその意味は揺らぎ、大正4年の「大日本国語辞典」では、

^{*8} 研究方法で示したように、「農業雑誌」も調べてみたが、「園芸雑感」など巖本らの記事は、園芸技術にとどまるものばかりだったので、今回の分析には加えていない。

^{*9} 園芸関連のものは、以前は「種芸」、「樹芸」と呼ばれ、明治3年には民部省勸農局に「種芸課」が、7年以降は内務省勸業寮農務課に「樹芸掛」がおかれている(通商産業局 1962)。

^{*10} 辻村常助は、その著「園芸の意義と其範囲」(辻村 1931)で、園芸という語の由来を述べているが、その導入がいつ頃からかは明確になっていない。

^{*11} この出品内容のありかたについては、その翌年の明治10年、日本で初めて行われた内国勸業博覧会でも、類似した形で継承されている。

^{*12} 仏語の「ラルチキュルチュール」は、英語のHorticultureで、この定義の後、Horticultureの訳としての園芸が広がっていくと考えられる。

^{*13} 広辞苑 第五版(1998)。

近代における園芸領域への団らんの浸透

表 2. 辞書にみる園芸の意味

書 名	出版年	出版社	園 芸
言海	1891 明治 24	六合館	ゑんげい；庭ヲ作ル技
日本大辞書	1893 明治 26	日本大辞書発行所	ゑんげい；庭ヲ作ル技術
日本大辞林	1894 明治 27	宮内省	—
帝国大辞典	1896 明治 29	三省堂	ゑんげい；庭園を築造する技術をいふ。
日本新辞林	1897 明治 30	三省堂	ゑんげい；庭園を築造する技術
ことばの泉	1898-1899 明治 31-32	大倉書店	ゑんげい；庭園を築造する技術
辞林	1907 明治 40	三省堂	ゑんげい；蔬菜・果樹又は花卉等の栽培
大日本国語辞典	1915-1919 大正 4-8	富山房	ゑんげい；庭園を作り、又花卉・果樹などを栽培すること。又その技術。
広辞林	1925 大正 14	三省堂	えんげい；蔬菜・果樹・花卉等の集約的栽培。

「庭園を作り、又花卉・果樹などを栽培すること。又その技術」となっている。

このように、明治 40 年頃までは、庭を作る技としての意味の強い「園芸」であるが^{*14}、明治 22 年 2 月には、「以前の植木屋流にとどまらず内外の植物を培養繁殖し種子苗木の交換及び園芸諸術の試験」をするとして、現在の園芸の意味へと導こうとする日本園芸会が設置され、その 2 カ月後の 4 月には、この会による「日本園芸会雑誌」が発刊される。

この頃になると、園芸という語を含んだ書籍が現れるため、次にこれらの資料を基に、「家庭園芸」に至る流れの有無について、検討結果を報告する。

2) 「家庭園芸」への流れ

「園芸」という語を含む独立した書物ではないが、百科全書の一部として、ヨーロッパの園芸術が紹介されたものが「泰西園芸術」（前原 1889-1890）である。ここでは、実業及芸術、学術及諸芸、題辭及挿図にわけて、各種技芸が紹介されていて、ここでの「園芸術」は「実業及び芸術」として分類されている。この実学的な位置づけのものには、その他、養鶏、養蚕、水産養殖、そして冶金術、彫刻術、活版術などが含まれており、「学術及び諸芸」に含まれる插花法や西洋料理法、さらに西洋遊戯法、音楽法など、どちらかという教養的で、文化的側面を持つものとは異なった扱いになっている。

「園芸術とは園圃に播種耕耘して花卉蔬菜の類を作るの術」と定義され、「泰西園芸術の範囲なるものは

頗る広汎茫漠」であるが、「第一 花園 第二 菓園

第三 菜園」の三大部門を概括すると説明されている。そして、花園については、「百般の花弁草木を栽培して庭園の修飾を為すの術にして我国に於いて謂はゆる植木師又は庭師というものの類なり」との説明がある。もちろん泰西の園芸術であるから、石や樹木を中心とする日本庭園とは異なったもので、緑葉のある樹木に、薔薇、ひまわり、すみれ、カーネーションなどの花卉類、青芝などが取り上げられ、規模の狭い小園庭もその中に扱われている。これらの説明は、現在、家庭を開放して行われるオープンガーデンに多くみられる洋風庭園と類似しており、その目的は、「人の心目を歛ばしむる」ものと、家族や家庭ではなく、一般的な概念としての「人」がその対象となっている。

この百科全書とはほぼ同じころ、園芸の書物として出版されたのが『園芸考』（横井 1889）で、園芸をそのタイトルに含む書籍としてはこれが最古であろうといわれている（辻村 1931, 3）。これより以前に、農商務省による「園芸論」で、その定義が出されているにもかかわらず、ここでの内容は、檀原朝から維新後まで、各時代の日本庭園の沿革の説明のみで、専ら技術的側面の説明に偏っている。もちろん家族などその庭を使う者を意識した記述はみられない。

このような日本庭園の作庭の技術的説明をその主旨とするのは、『図解庭造法』（本多 1890）も同様で、「庭園ノ大意ハ元来心目ヲ樂シマシムル」ことであって、ここでの心目も、特に家族に限定されてはいない。

続く、『園芸論』（鈴木 1890）は、目次にすぐ「蔬菜」の文字があり、土壌及地形、気候、種子と植物学的内容の植物の育成技術書となっていて、園芸その

^{*14} 辻村も「園芸なるものが、我邦に普及したのは、恐らく明治四十年以後大正年間に成ってからであろう」と述べている（辻村 1931, 2）。

ものがどのような目的でなされるかの記述はない。

また、『通俗菓園法』(青柳 1893)では、農家業の余業として、果樹を栽培し利益を上げることがを薦めるための栽培技術が中心で、この視点は、産業としての園芸を促進するものであって、果樹栽培等に力を入れる明治政府の方針に従うものではあっても、家庭の団らんを視野に置いたものではない。

しかし、同じく明治26年に出版された『簡易園芸法』(角田 1893)になると、その内容は異なってくる。園芸法に、「簡易」がついたためとも思われるが、初めの「例言」に、果樹花木など、植物を生育させるための説明はするが、五穀蔬菜など農産に属するものは省略する(角田 1893, 1)との説明がある。また、目録の初めに「本邦園芸の区別及びその盛衰」と、園芸そのものの内容や世界の状況を説明する項目が設けられ、園芸という用語の整理が行われている。「園芸」という語の、庭を作る意味と西洋の Horticulture としての意味の混在がまだ存在したためであろう。

角田によると、園芸を技とする者には、花木盆栽を培養して雅客の需に応ずる仕立物師、庭園の構造を事とする庭師、果樹花木の苗種を繁殖するを以て技とする苗物師の3つがあり、これらを総称して植木屋と呼び、その必要に応じてその技を選択すべきであるが、現実には、その選択を誤ることが多いという。江戸からの流れで、いろいろな種類の植木屋があったにもかかわらず、新たに庭をもった新中間層と言われる人たちには、そういった知識がなかった当時の状況が伺える。また、このような解説から、一般の家庭に向けての園芸書であったことがわかるが、そのことは先に上げた女学雑誌にこの本の紹介がなされていることでもわかる。つまり、「家庭園芸」と題されていないが、女性をその担い手とする家庭にむけての園芸書なのである。

また、園芸術については、西洋の例もあげ、「アルポリキュルチュール」の種樹術、「フロリキュルチュール」の養花術、そして、「ジャルジナーージュ」の造庭術を含み、これらを総称したものが、「アルチキュルチュール」という「園芸術」で、その意味は園事を経営することであると説明されている。

さらに、西洋の園芸術との比較がなされ、日本の庭園は西洋と意匠が異なり、深山幽谷の景を模して自然の風致を存するのであるが、洋風の庭園は、花を摘み、香を尋ね自由に逍遙緩歩する花園のようなものと説明される。従って、その目的は、西洋は身体の運



図1. 日用百科全書『住居と園芸』(大橋 1896)にみる庭での団らん図

動を助けるため、東洋は精神を養うためとなり、単に鑑賞だけでなく、それぞれ異なった目的で利用される西洋と東洋の庭の比較がされている。

この『簡易園芸法』の後、日用百科全書の一つとして、一般家庭を対象とした大橋又太郎の『住居と園芸』(大橋 1896)が出版される。初めの「凡例」で、「家」が、夫婦、父母、兄弟、従属等、一団のものがあって存在するものであると、単にものとしての家ではなく、そこに住まう人を意識した記述が現れる。さらに、「住居は家庭の元素たり」と、家の中心は家庭で、「団樂の和気を妨げられ」る家はよくないものであると、家庭の団らんを重視する考え方が現れる。

以後の本文のほとんどは、山水の作りかたや築山など、これまでの園芸書と似た、日本庭園の作り方の解説に終始するが、ただ、それまでの日本庭園の解説書とやや異なる点は、花園や草木を用いるときに心得るべきことが付加されていること、即ち、花や草木を多く取り入れる西洋の庭が意識されていることである。しかも特に「家族の団樂」のためといった説明はないものの、それを示す挿絵が登場する。

図1は、『住居と園芸』に現れる、庭で団らんする家族の姿である。背景の庭は日本庭園で、しかも傍らには盆栽もあり、庭そのものはこれまでのものとあまり変わらない。しかし、そこで中心となるのは、家族の団らんする姿である。この『住居と園芸』は明治29年に発行された後、37年までに9版を重ねており、当時、多くの人に読まれたようである。

続く、高橋の『蔬菜草花栽培全書』(高橋 1897)は、これまでの庭を含んだ園芸書と異なり、庭の作り方についてはまったく触れられず、そのタイトルのとおり、

近代における園芸領域への団らんの浸透

野菜、草花の育て方の技術書である。また、同じ著者の『園芸学』（高橋 1901）では、園芸術と園芸学の違いについて述べられ、「造庭術の如き園芸の範囲を脱せざるが如きも、建築術及び美術思想と親密の関係を有するものなれば、寧ろ園芸の範囲外に置き別に一科を設くるの必要あるものなるべし」と、これまで園芸に含まれていた造庭術と一線を画し、現在の園芸につながる考え方が提示されている。従ってこの書は家族や団らんを意識した造庭書というより、それとは異なる栽培等の技術書といったほうがふさわしい。

しかし、東京農学園主である江原春夢によって書かれた『果樹草花盆栽造庭園芸全書』（1902）は、同じく果樹草花の栽培を意識させるものであるが、そこには造庭も含まれているため、この時代もまだ、園芸の意味が安定していないことがわかる。園芸については、「無邪気にして娯楽の業たる」と共に「比較的に利益多くして愉快なる事業の最たり」（江原 1902, 1-2）と、その娯楽としての効用について触れられている。そして、植物の育成に必要な生理的な説明の後、果樹、茶樹、花木、そして、ビテンス、ヘリアントース、スターフロックスといった西洋の花を含んだ数多くの草花の種類が挙げられ、植物的には和洋折衷の状況が生まれていることがわかる。

そして、近藤による『園芸学講義』（1902）は、造庭を除いた、果樹、蔬菜、花卉を含む講義の解説で、作物、植物についての技術的な説明が主となっている。

このように、造庭術が含まれたり含まれなかったり、の当時の園芸書の状況であるが、明治 36 年 5 月には「家庭園芸」を含む『家庭園芸談』（小谷保太郎 1903）が出版される。ここで、先述したように「一家団欒の下に楽しき家庭を作るには園芸をやるに如くは無い」（小谷 1903, 1）と目次の初めに「団欒の娯楽」という項目を持つ園芸書が登場するのである。

4. 要約とまとめ

ホームの訳語としての家庭と、Horticulture の訳語としての園芸は、ともに近代に入って使われるようになった言葉である。この二つの語を含み、その目的を家族の団らんとする「家庭園芸」は、明治期後半に登場した。本稿では、この「家庭園芸」を対象とし、家庭がどのような経緯で園芸との関係を深め、「団らん」をその領域に浸透させていったのかという疑問を解くことを目的として研究を行った。主に用いた資料は、ホームと団らんに関する言説の発祥とされる女学雑誌

と明治期に入って出版された園芸書である。

その結果、以下のような流れで、家庭と園芸の関係が生じ、園芸領域に団らんが浸透していくことがわかった。

1) 女学雑誌の中での流れ

- ① 巖本による「一家の和楽団欒」とホームの登場。
- ② 「一家の和楽団欒」の担い手＝女性という位置づけ。
- ③ 女性の役割として、家内における装飾、清潔等の家事の抽出。
- ④ 家事をまとめた「家政」が項目として登場。
- ⑤ 「家政」の中に、技術としての「庭づくり」が登場。
- ⑥ 「家政」の中に「農業園芸」「園芸法」が登場。以後連載として定着。

女学雑誌における以上のような流れとは別に、「園芸」領域には、以下のような流れがみられた。

2) 園芸書からの流れ

- ① 博覧会資料に、「Horticulture」の訳としての「園芸」が登場。しかし一般には造庭の意味の園芸で移行。
- ② 「Horticulture」の意味での日本園芸会が設立され、雑誌の発行が開始される。しかし最初の園芸書は、造庭の意味のものとして出版され、一般の辞書にも、その傾向は続くが、明治 40 年ころから蔬菜、果樹、花卉を含む現在用いられている意味が現れる。
- ③ 従来の農産に属するものを省略し、果樹花木など植物を生育させるための説明をするという『簡易園芸法』という書物の登場。女学雑誌にもその広告が出され、園芸書の女性領域への参加が始まる。

このような、産業方面の園芸とは異なる園芸書の出版を経て、

- ④ 日用百科全書の一つとして『住居と園芸』が登場。団らんの場として、住居と庭の重要性が述べられ、家族が団らんする姿を含む庭の挿絵が登場する。

この挿絵の背景は盆栽等も含む日本庭園だが、主人公は庭ではなく団らんする家族である。

このような家族の団らん風景を描いた挿絵の登場後、

- ⑤ 「家庭園芸」をそのタイトルに含む『家庭園芸談』が登場する。

以上のことから、女学雑誌における巖本の「一家の和楽団欒」や「ホーム」の提唱が次第に広がる中、その和楽団らんの担い手として女性が位置づけられていったこと、そして、その女性の役割として、清潔、装飾を重視する家事が強調され、それらが「家政」項目としてまとめられていく流れの中で、園芸が取り入れられていったことがわかる。そして、このような家政項

目に園芸が取り入れられる状況を経て、園芸書と家政書がともに並ぶ下地ができ、園芸という領域の中に団らんを目的とする「家庭園芸」が生じてきたと考えられる。

つまり、近代家族の源流と見られるホーム、団らんに関する言説の登場は、それを機に、その団らんの担い手としての女性の役割を明確にさせ、さらに庭や園芸も家庭領域に取り込んでいくという大きな広がりを見せることが明らかになった。今後はこの様な流れの中で、主に近代家族の中心となった新中間層の人たちを対象とし、庭と家族、家庭のあり方の関係の具体的変化について、さらに深く調べていきたいと考えている。

本研究を進めるに当たり、兵庫県立淡路景観園芸学校 竹田直樹先生には、多くのご助言を頂きました。また、能勢健吉先生にも、助言とともに貴重な資料を提供して頂きました。ともに心から感謝したいと思います。

引用文献

- 青木宏一郎 (1999) 『江戸のガーデニング』, 平凡社, 東京, 4-18
- 青柳浩二郎 (1893) 『通俗菓園法』, 博文館
- ビーチャル夫人 (1892) 妾が良人ビーチャル氏 (一), 女学雑誌, **308**, 831-833
- ハート夫人 (1892) 日本の花園, 女学雑誌, **327**, 1306
- 平岩愼保 (1887) 婦人の職掌 (其一), 女学雑誌, **76**, 104-107
- 本多錦吉郎 (1890) 『図解庭造法』, 団々社
- 井上次郎 (1891) 国政と家政, 女学雑誌, **257**, 187-188
- 井上次郎 (1892) ホーム建設心得, 女学雑誌, **321**, 1157-1159
- 犬塚都子 (1989) 明治中期のホーム論—明治 18~26 年の『女学雑誌』を手がかりとして—, お茶の水女子大学人文科学紀要, **42**, 49-61
- 伊勢時雄 (1888) 日本現今之婦人 (其三), 女学雑誌, **117**, 157-159
- 岩堀容子 (1995) 明治中期欧化主義思想にみる主婦理想像の形成—『女学雑誌』の生活思想について, 『ジェンダーの日本史 下』(協田晴子, S・B・ハンレー編), 東京大学出版会, 466-467
- 巖本善治 (1886a) アメリカ婦人の職業, 女学雑誌, **19**, 113-115
- 巖本善治 (1886b) 女子と耶蘇教 (其二), 女学雑誌, **38**, 141-143
- 巖本善治 (1887) 叢話 遊楽の事, 女学雑誌, **46**, 104-106
- 巖本善治 (1888a) 日本の家族 (一), 女学雑誌, **96**, 113-116
- 巖本善治 (1888b) 日本の家族 (三), 女学雑誌, **98**, 159-163
- 巖本善治 (1888c) 日本の家族 (四), 女学雑誌, **99**, 183-187
- 巖本善治 (1888d) 日本の家族 (五), 女学雑誌, **100**, 209-213
- 巖本善治 (1888e) 日本の家族 (七), 女学雑誌, **102**, 23-27
- 巖本善治 (1888f) 家内の会話, 女学雑誌, **130**, 232-234
- 巖本善治 (1889a) 女子読本 緒言, 女学雑誌, **144**, 付録 通信女学
- 巖本善治 (1889b) 犠牲献身, 女学雑誌, **172**, 387-392
- 巖本善治 (1889c) 愛国の情, 女学雑誌, **178**, 57-65
- 巖本善治 (1889d) ダイナマイト, 女学雑誌, **184**, 229-232
- 巖本善治 (1890a) 細君内助の弁 (上), 女学雑誌, **224**, 662-663
- 巖本善治 (1890b) 細君内助の弁 (下), 女学雑誌, **226**, 5-10
- 女学雑誌 (1894) 家の園播種の時節, 女学雑誌, **373**, 320-322
- 女子読本 (1888) 家と云う事並びに家事経済の事, 女学雑誌, **144**, 通信女学 3
- 家庭叢談 (1876a) 世帯ノ事, 家庭叢談, **1**, 3
- 家庭叢談 (1876b) 教育の事, 家庭叢談, **3**, 8
- 川添 登 (2003) 家庭生活の 20 世紀, 『家庭生活の 100 年』(日本生活学会編), 生活学第 27 冊, ドメス出版, 12
- 小糸 (1890) 家政の精神, 女学雑誌, **245**, 539-541
- 近藤 隆 (1902) 『園芸学講義』, 静岡県安倍郡農会
- 小谷保太郎 (1903) 団樂の娯楽, 『家庭園芸談』, 吉川弘文館, 1
- 江原梅松 (春夢) (1902) 『果樹草花盆栽庭造園芸全書』, 博文館
- 厚生労働省 (2006) 「家族・地域の絆再生」政務官会議 PT 中間とりまとめ「家族・地域の絆再生」政務官会議 PT—あったかハッピープロジェクト—
- 小山静子 (1999) 『家庭の生成と女性の国民化』, 勁草書房, 29-37
- 前原幽園 (抄訳) (1889-1890) 『実地応用技芸百科全書第六編 泰西園芸術』, 博文館, 2349-2475
- 明治十年内国勸業博覧会出品解説 (1878) 明治十年内国勸業博覧会出品目録, 内国勸業博覧会事務局, 222
- 宮森一彦 (1993) 「家庭の和楽」と「家庭の親愛」—近代日本における排他的親密性の形成をめぐる—, 社会学評論, **54** (1), 2-15
- 牟田和恵 (1990) 明治期総合雑誌にみる家族像—「家庭」の登場とそのパラドックス, 社会学評論, **41** (1), 12-25; (1996) 『戦略としての家族—近代日本の国民国家形成と女性』, 新曜社
- 中島俊子 (1890a) 婦人の心得 (一), 女学雑誌, **241**, 425
- 中島俊子 (1890b) 婦人の心得 (三), 女学雑誌, **244**, 510
- 日本出品解説第一 (1876) 米国博覧会報告書, 米国博覧会事務局
- 新渡戸稲造 (1890) 家政学は一の学術なり, 女学雑誌,

近代における園芸領域への団らんの浸透

203, 68-71

農商務省(1885)園芸論, 農商工公報, **6**, 194-200表 真美(1998)明治期高等女学校家事科検定教科書における食事の共有と団欒, 家政学原論部会報, **32**, 82-89表 真美(2001)家事教科書にみる家族の食事と団らんに
ついでに, 家政学原論部会報, **35**, 38-47表 真美(2006)明治期婦人雑誌, 総合雑誌における「食卓での家族団らん」, 家政誌, **57**, 369-378

大橋又太郎(1896)『日用百科全書第八編 住居と園芸』, 博文館

落合恵美子(1989)『近代家族とフェミニズム』, 勁草書房
Rapports(1875) *Exposition Universelle de Vienne en 1873*,
Imprimerie Nationl, Paris清草庵(1885)生花水揚の秘伝, 女学雑誌, **8**, 157-158仙波千枝(1995)「家庭」の「趣味」としての園芸—『婦女新聞』の例をとりあげて—, 日本文化研究, 筑波大学大学院博士課程日本文化研究学際カリキュラム紀要, **16**, 93-108しづ子(1890)英国上流の貴婦人, 一日間のくらし方, 女学雑誌, **225**, 701-703

下田歌子(1893)『家政学』上下, 博文館

鈴木文次郎(1890)『園芸論』, 伊藤活版所出版部

高橋久四郎(1897)『蔬菜草花栽培全書』, 東京興農園

高橋久四郎(1901)『園芸学』, 大日本実業学会

高橋久四郎(1903)『園芸通論』, 博文館

畜勘子(1893)田家のこよみ, 女学雑誌, **336**, 1579-1580津田 仙(1897)澳国博覧会農業園芸ノ伝習及爾後ノ状況,
『澳国博覧会参同紀要』(田中芳男, 平山成信編), 33-36辻村常助(1931)園芸の意義と其範囲, 『園芸総論』(石井
勇義編集), 実際園芸社, 1-72

角田音吉(1893)『簡易園芸法』, 博文館

通商産業局(1962)第一章 農商務省成立以前, 『商工政策史 第三卷 行政機構』, 商工政策史刊行会

内村鑑三(1888)クリスチャン, ホーム, 女学雑誌, **125**, 102-104山本敏子(1991)日本における<近代家族>の誕生—明治期ジャーナリズムにおける「一家団欒」像の形成を手掛りに—, 日本の教育史学, **34**, 82-96山岡邦三郎(1888)細君の職務, 女学雑誌, **114**, 87-89山下石翁(1891a)総理大臣兼内閣大臣, 女学雑誌, **264**, 377-378山下石翁(1891b)経済学, 女学雑誌, **270**, 531-532

横井時冬(1889)『園芸考』, 大八州学会

読売新聞(1881)4月12日付朝刊, 1面2段

読売新聞(1890)3月11日付朝刊, 2面2段